論文

修学旅行における地域の美術館の利用の可能性

－浜松市美術館の富士宮市立Ｋ小学校受け入れ事例より－

島口直弥[1]　芳賀正之[2]

（静岡大学教育学部附属教育実践総合センター）

Possibility of using local museums on school trips

From the Hamamatsu City Museum of Art acceptance case of Fujinomiya Municipal K Elementary School

Naoya Shimaguchi　　Masayuki Haga

Abstract

In this thesis, I will make a hypothesis about what kind of approach is possible and the direction for a wide range of schools, including those outside the prefecture on school trips, to use local museums. Then, for school groups that actually applied for group viewing on school excursions, we customized and practiced an educational dissemination program in accordance with the hypothesis, and verified the hypothesis based on the children's expressions. Through the verification of hypotheses, we would like to discover new possibilities of using local art museums on school trips.

キーワード：美術館、鑑賞、教育普及、修学旅行、主体的・対話的で深い学び、教科等横断的な学び

１．はじめに

浜松市美術館は、各展覧会において学校等の団体鑑賞の受け入れを積極的に行っている。筆者の前職は小学校教員で、現在、教育委員会の人事交流の一環として、指導主事兼学芸員という立場で当館に勤務し、展覧会運営の傍ら、学校の要望に応じた教育普及活動を実施している。[1)] その対象は、浜松市を中心に磐田市や湖西市等の近隣市町を含めた静岡県西部地域に所在する団体が大半を占めるが、令和元年度以降、静岡県外や静岡県東部地域に所在する学校からの鑑賞の申し込みが僅かながら見られるようになった。[2)] これらはいずれも浜松市を目的地として修学旅行に訪れた学校で、コロナ禍により従来の目的地（首都圏・関西方面等）からの変更を余儀なくされてのものである。[3)]

ここで問題となるのは、浜松市美術館で従来取り組んできた教育普及活動が、その対象として県外を含めた広範囲の学校の子供達を想定してこなかったことである。地域の美術館の大きな役割は、地域ゆかりの作品を収集・保管、調査研究し、展示を通してその価値や魅力を発信することである。[4)] その上で、主に地域の子供達に地域ゆかりの作家や作品、文化財の実物に対峙する機会を提供することを柱に教育普及プログラムをカスタマイズしてきた。しかし、浜松市やその周辺地域以外の子供達に、浜松市周辺地域ゆかりの作家その作品、文化財を紹介するにあたっては、その意義が異なり、別の視点でのアプローチが必要になってくる。同時に、世界各国、日本各地の優れた美術作品や文化財を借用・展示し、修学旅行の訪問先として定番となっている都市の美術館と同様に、子供達が幅広い芸術･文化を享受する場を提供することも求められる。

コロナ禍の経験は、地域の美術館においてこれまであまり考えられてこなかった地域外の広範囲の学校団体の利用という、美術館における教育普及活動について新たな視座から考えるきっかけとなった。そして、そうしたニーズに応える教育普及プログラムの開発に取り組むことが、学校の美術館利用の裾野を広げることにつながるのではないかと考えるようになった。

学校の修学旅行における美術館・博物館の利用については、事前学習としての実践報告が散見される。[5)] 静岡県内では、上原美術館（下田市）が仏像を主題とした修学旅行事前学習を継続する他[6)]、浜松市美術館でも、令和３年度の「みほとけのキセキ－遠州・三河の寺宝展－」に関連し、「古都研修」で奈良・京都を訪問予定の中学生を対象に事前学習としての「仏像講座」を筆者が実施した。[7)]コロナ禍以降、修学旅行での活動に美術館等を利用する件数は全国的に増えているが[8)]、そうした事例の報告はコロナ禍以前に修学旅行訪問先の定番都市の美術館を利用しての実践例が僅かに確認できるのみで[9)]、地域の美術館が修学旅行中の子供達を受け入れて実施した教育普及プログラムの実践の報告は殆ど確認できないのが現状である。[10)]

本論では、県外を含めた広範囲の学校が、修学旅行等で地域の美術館を利用するにあたり、どのような取り組みが可能かを追及する。実際に修学旅行に訪れた子供達を対象に仮説を立て、それに則した教育普及プログラムをカスタマイズして実践し、子供達の表われをもとに検証する。その上で、修学旅行での地域の美術館の利用という､新たな可能性を見出していきたい。

２．研究方法

⑴　仮説設定の前提

浜松市美術館にて筆者が取り組んできた教育普及活動で、対象となる子供達が学校の教育課程の一環で美術館を利用している場合、学習指導要領（平成 29 年告示）の記述をふまえてプログラムをカスタマイズしてきた。子供達は、図画工作科・美術科はもちろん、社会科、総合的な学習の時間、特別活動等、学校が編成する教育課程における教科・領域等のいずれかの学習で美術館を訪れている。学校（教員）はそれらに基づいて子供達に育ませたい資質・能力を想定して美術館を利用している。筆者は、指導主事の立場から、学習指導要領をもとに、学校の教育課程やそれに伴う美術館利用の目的、子供の発達段階等を具体的にイメージする。その上で、学芸員の立場からそれらと展覧会の見所（作品・作家、展示構成等）との接点を見出し、プログラムに反映している。[11] ここでは、修学旅行での地域の美術館の利用の方向性に関する仮説の前提となる、学校の美術館利用と修学旅行の関連について、学習指導要領（平成 29 年告示・「解説」を含む）の記述をもとに整理したい。

①　学校の美術館利用

小学校・図画工作科、中学校・美術科ともに、内容の取扱いと指導上の配慮事項にて、地域の美術館の利用や連携を促す言及がなされる。それは「造形的な見方・考え方」を働かせて実物と対峙し、「思考力、判断力、表現力等」を育成することを主な目的とし、その記述を根拠に美術館を利用する学校が多い。[12・13]

一方、学校の美術館利用の形は、図画工作・美術科という単独の教科の枠には留まらないことがある。「みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展ー」では、小中学生を対象に、図画工作科の「造形的な見方・考え方」に加え、社会科の「社会的な見方・考え方」を働かせて仏像に歴史的側面からアプローチする教育普及プログラムをカスタマイズした。[14] 時には、総合的な学習の時間の「探究課題『地域』」の解決に向け、地域の美術館の仕事や役割を調べるために美術館を利用したいという小学校の要望も受け入れた。美術館は、展覧会の内容はもちろん、その存在意義自体をもとに、様々な教科・領域の学習に利用可能な施設といえる。また、学習内容によっては、複数の「見方・考え方」を相互に働かせ有機的に結びつける「教科等横断的な学び」の具現も可能であると考える。

②　修学旅行と美術館

修学旅行は小・中学校ともに特別活動の学校行事に位置付けられる。小学校は「遠足・集団宿泊的行事」、中学校は「旅行・集団宿泊的行事」と称される。特に中学校では「文化的行事（中略）との関連などを重視して、単なる物見遊山に終わることのない有意義な旅行・集団宿泊的行事を計画・実施するよう十分に留意する」と言及される。[15] 前述の「みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展ー」にて中学生を対象に実施した「古都研修」事前学習は、この記述に基づいた修学旅行に係る美術館利用の一例といえるが、この視点は小学校においても当然必要な事柄といえよう。

関連を重視すべきとされる文化的行事は、「多様な文化や芸術に親しみ、美しいものや優れたものに触れることによって豊かな情操を育てること」が小・中学校共通のねらいとされる。[16・17] 内容として、小学校では「美しいものや優れたもの、地域や我が国の伝統文化等、自他のよさについて考え、触れたり、発表し合ったりして、互いのよさを認め合うことができるようにする」[18]、中学校では「生涯にわたって、多様な文化芸術に親しむとともに、集団や社会の形成者として伝統文化の継承や新たな文化の創造に寄与しようとする態度（中略）を養う」[19] が挙げられ、美術館をはじめとした外部の文化的な作品や催しを鑑賞する機会を設けることがその具体例として示される。

このように文化的行事のねらいと内容は、特別活動の「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせることのみならず、図画工作・美術科の「造形的な見方・考え方」を働かせることとの親和性が高いものと思われる。これは文化的行事との関連を重視した「旅行・集団宿泊的行事」としての修学旅行で美術館を利用することの意義を支えるものといえよう。

⑵　仮説と検証の手立て

修学旅行による県外を含めた広範囲の学校が地域の美術館を利用するにあたり、どのような方向性での教育普及プログラムのカスタマイズが可能かについて、次の３つの仮説を設定した。その上で、それらの仮説を検証するための手立てについて述べる。

＜仮説１＞

展覧会の特質に応じて著名な作家の作品や展示の要となる作品を取り上げることで、修学旅行訪問先の定番都市の美術館同等の優品に触れる機会を保証し、「造形的な見方・考え方」を働かせて自分の見方・感じ方を深める図画工作・美術科の「深い学び」につなぐことができるのではないか。

＜仮説１＞検証の手立て

東京や京都等、修学旅行の訪問先の定番である都市には、世界各国の著名作家の手による名品、日本国内の国宝・重要文化財の指定を受ける作品や文化財を所蔵する美術館が多い。地域の美術館では、出陳数は及ばずとも、著名な作家の作品や指定文化財をはじめ、多くの来館者を呼び込むために、展覧会の要（売り）となる名品を出陳することがある。教育普及活動の中で、子供達がこれらの「実物」と対峙する機会を設定し、それをもとにした教育普及プログラムを展開することで、子供達に修学旅行の本来の訪問先である東京や京都等の都市の美術館と同等の鑑賞機会を保障した

り、子供達の鑑賞への主体性を高めたりできるものと考える。また、子供達の見方や感じ方を広げたり深めたりすることを重視した視点の提示や投げ掛けにより、形や色、作品全体のイメージといった造形的な視点で「実物」や友達との対話を促し、「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力を育む「深い学び」につなげることができるのではなかろうか。

＜仮説２＞
作家ならではの豊かな発想力や構想力、テーマ性や表現方法の独自性が顕著な作品を取り上げることで、子供の興味・関心を掻き立てたり、既成概念を覆したりし、自分の見方や感じ方を深めながら、修学旅行の「楽しい思い出」となる鑑賞活動を具現することができるのではないか。

＜仮説２＞検証の手立て

修学旅行の目的の一つに「楽しい思い出」をつくることがあげられる。そこで、子供達が「美術館」と聞いてイメージするであろうアカデミックな作品と対極をなすような意外性の高い作品と対峙させることが、子供達の感性を掻き立て、楽しい鑑賞活動を具現することにつながるのではないかと考えた。例えば、テーマやモチーフ、材料や表現方法に作家の独自性が顕著に表れた作品をもとに教育普及プログラムを考案することが考えられる。その際、＜仮説１＞同様、形や色、作品全体のイメージといった造形的な視点で「実物」や友達との対話を促し、「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力を育むことに重点を置くことに留意する。子供達の、図画工作・美術科での表現・鑑賞の経験で培われた美術作品に対する既成概念を覆すであろう作品と対峙した経験は、見方や感じ方を広げたり深めたりすると同時に、美術館で鑑賞活動を行ったことそのものを修学旅行の「楽しい思い出」の１つとして記憶に留めることにつながるのではなかろうか。[20)]

＜仮説３＞
美術館や展覧会の独自性と、子供の実態や学校所在地の地域性の接点となる作品を意図的に取り上げることで、子供の鑑賞活動への興味・関心を高め、総合的な学習の時間等との関連を通した「教科等横断的な学び」から、自分たちが暮らす地域への愛着や郷土愛を育むことができるのではないか。

美術館を利用する子供達が通う学校が所在する地域に何らかの関連がある作家や作品を取り上げることで、子供達が自分や自分を取り巻く社会と美術作品とのつながりを見出し、主体的に鑑賞活動に取り組むことができるものと考える。その際、図画工作・美術科の「造形的な見方・考え方」に加え、総合的な学習の時間、特別活動等の「見方・考え方」から育む郷土愛に関する資質・能力との関連を意識したプログラムを考案する。子供達の学習履歴や学校の教育課程との兼ね合いを引率教員との連携を通して確認し、美術館での鑑賞活動が子供達の郷土に関する日常の学習と教科等を横断する形で有機的につながるように配慮したい。

３．実践の場となる展覧会と対象の子供達

仮説の検証に向け、筆者が企画・運営に携わった企画展「静岡県立美術館超名品展－風景と人間－」（令和３年 11 月～12 月、以下「県美展」）に修学旅行中の団体鑑賞で訪れた静岡県富士宮市のＫ小学校６年生を対象に、教育普及プログラムを実践することとした。ここでは、県美展の概要とＫ小学校の子供達の実態、県美展とＫ小学校の子供達の間に見出すことができる接点、それらを考慮したうえでＫ小学校の子供達への教育普及プログラムで取り上げる作家・作品について、それぞれ概観する。

⑴　県美展の概要

静岡県立美術館は、17 世紀以降の東洋・西洋の風景画、静岡県ゆかりの作家の作品、ロダンを核とした近現代彫刻のコレクションが充実している。県美展は、それらのコレクションの中から、浜松市出身の木下直之館長が出陳作品を厳選し、展示構成を含めた展覧会全体を監修したものである。[21)] 出陳作品は、絵画や彫刻、写真から映像作品に至るまで 60 点以上を数え、西洋画ではモネやゴーギャン、日本画では谷文晁等、著名な作家の作品も並んだ。[22)] また、森村泰昌や宮島達男等の現代作家、浜松市や静岡県ゆかりの作家の作品も数多く出陳された。サブタイトルにある「風景と人間」に準え、２階は主に風景を主題とした作品を、１階は人間を主題とした作品を中心に構成された。（図１）

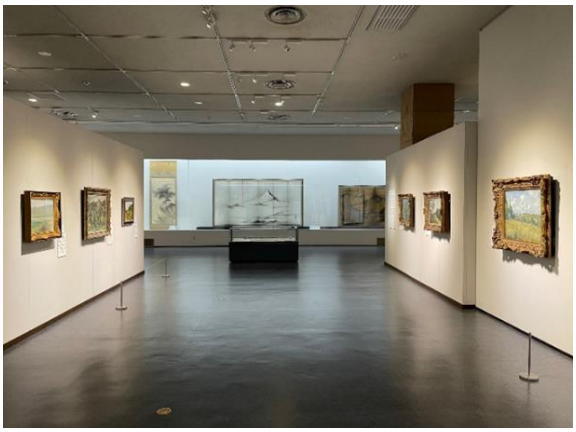


図１　県美展の展示風景（２階展示室）

⑵　Ｋ小学校の子供達の実態

Ｋ小学校は、富士宮市の南西部に位置し、校舎や運動場から雄大な富士山を裾野から頂上まで眺めることができる。こうした地域の特色を活かし、総合的な学習の時間では富士山に関する探究課題を設定し、３年生から４年間、探究的な学びを継続している。県美展会期中に修学旅行で浜松市美術館に訪れたのは、６年生４学級のうち２学級（約 60 人）で、浜松市美術館へ訪れることは、他の訪問先を含め各学級で子供達が話し合って決めたという。修学旅行の旅程の中で、浜松

市美術館の訪問を最も楽しみにしていたという子供もおり、美術館での作品の鑑賞に前向きな子供が比較的多い学級とみることができる。

⑶　取り上げる作家・作品

県美展に出陳された約 60 点の作品のうち、３つの仮説をもとに、Ｋ小学校の子供達の実態に応じて、重点的に紹介すべき作家・作品を厳選した。（図２）

作品群①は、研究の＜仮説１＞を想定したものである。従来通りの東京方面への修学旅行が実現していれば、Ｋ小学校の子供達が首都圏の美術館で著名な作家の作品を鑑賞していたものと仮定し、その代替として取り上げるものである。展覧会の要としてポスターのメインビジュアルにもなったゴーギャンの油彩、自画像というシンプルな主題に向き合った曽宮一念の作品に「造形的な見方・考え方」を働かせて対峙することで、「思考力・判断力・表現力等」の育成をねらう。

作品群②は、研究の＜仮説２＞を想定したものである。子供達の修学旅行での「楽しい思い出」をつくることを目的に、特殊でユニークな表現方法を用いる現代作家の作品を取り上げる。石田は、日常にあふれる物と男性を一体化することで社会を風刺し、メッセージを込める。宮島はＬＥＤデジタルカウンターを用い、「それは変化し続ける」、「それはあらゆるものと関係を結ぶ」、「それは永遠に続く」というコンセプトを表現する。森村は、名画の中に自分が入り込んだり、名画に描かれる人物に扮したりするセルフポートレートで知られる。こうした特殊な表現方法を用いる作家の作品と子供達を対峙させることで、表現の多様性や意外性等を味わわせ、子供達に固定概念が覆えされる面白さ、探究的に作品を鑑賞する楽しさを体験させたいと考えた。

作品群③は、研究の＜仮説３＞を想定したものである。富士宮市の子供達を念頭に、富士山を主題とした作品を、洋画、日本画、浮世絵、写真等、様々なジャンルから取り上げている。県美展において、富士山を主題とした作品群は展示に要である。また、Ｋ小学校の子供達が総合的な学習の時間で富士山を探究課題として学習を進めている最中であることをふまえ、富士山に図画工作科の「造形的な見方・考え方」でのみならず、総合的な学習の時間における「探究的な見方・考え方」を通して対峙させたいと考えた。富士山に関する知識を多面的・多角的に習得させたり、教科等横断的に新たな見方や感じ方に気付かせたりすることで、富士山を通して地域に対する郷土愛を高めることにつなげたいと考えた。

以上、３つの仮説をもとに厳選した作品群をもとに、学校（教員）の要望、子供達の人数や滞在時間に応じて、教育普及プログラムをカスタマイズして、実践に取り組むものとする。

作品群① 世界と日本の著名作家による作品	
ゴーギャン	家畜番の少女
曽宮一念	自画像
鶴田吾郎	余の見たる曾宮君
作品群② 幅広い表現方法の現代作家による作品	
石田徹也	燃料補給のような食事
宮島達男	LIFE(complex system)no.1
森村泰昌	批評とその愛人⑴～⑺、マケット
作品群③ 富士山を主題とした作品（一部）	
谷文晁	富士山図屏風
狩野永岳	富士山登流龍図
和田英作	富士
石川直樹	Mt.Fuji #38

図２ Ｋ小学校の子供達に紹介する主な作家・作品

４　教育普及活動の実践

⑴　プログラムの構成

浜松市美術館で従来実施してきた教育普及プログラムにおける鑑賞活動は、学芸員の作品解説による知識提供型、対話をもとに子供達の作品に対する見方や感じ方を引き出す対話型の２つに大別される。前者は高校生や大学生、一般来館者に対し実施することが多く、後者は小中学生や幼稚園児に実施することが多い。このことを事前にＫ小学校の引率教員に伝えたところ、子供達にとっても、教員にとっても、学校団体として初めての美術館利用であるため、基本的な教育普及活動の流れは美術館側に委ねるが、前者の内容と後者の内容をバランスよく織り交ぜた形で教育普及プログラムを構成してほしいとの要望があった。そこで、３つの＜仮説＞に基づいて選択した作品を、１時間３０分で６０人の子供達を効果的かつ効率的に対峙させるため、「ギャラリートーク（学芸員の展示解説）」にて作品群①・②を、「修学旅行で再発見！私たちの富士の魅力」（専用のワークシートをもとに教員とともに自由に館内を観覧しながら鑑賞）にて作品群③を紹介する構成とし、それを２組が時間を分けて交互で実施する形をとった。（図３）

分	Ａ組（約 30 人）	Ｂ組（約 30 人）
10	・浜松市美術館と県美展の概要紹介 ・活動のオリエンテーション	
35	ギャラリートーク 学芸員の展示解説 （作品群①・②）	修学旅行で再発見！ 私たちの富士の魅力 （作品群③）
35	修学旅行で再発見！ 私たちの富士の魅力 （作品群③）	ギャラリートーク 学芸員の展示解説 （作品群①・②）
10	・活動の振り返り ・学芸員の話	

図３　Ｋ小学校対象の教育普及プログラムの構成

⑵　プログラムの内容

①　ギャラリートーク（学芸員の展示解説）

ギャラリートークは、学芸員が子供達を展示室へ案内し作品解説を行う。ここでは作品群①・②の作品を紹介した。ギャラリートークは、基本的に学芸員から聞き手への情報の伝達が大半を占める。しかし、小学生の鑑賞活動には「思考力・判断力・表現力等」の育成を目的に、見方や感じ方を広げたり深めたりするような配慮が必要である。そこで、子供達が興味・関心示すものと思われる視点を提示したり、クイズを交えて子供達の考えや気付きを拾い上げたりと、思考・判断・表現の機会を可能な限り確保するようにした。

＜作品群①＞

はじめに、ゴーギャンの「家畜番の少女」を取り上げた。この作品は県美展のポスターやテレビＣＭにもキービジュアルとして使用された展覧会の要となる作品である。活動の導入で本作を取り上げることで、子供達に、美術館が著名作家の作品の「実物」と対峙できる場所であることとその価値を実感してもらいたいと考えた。また、ゴーギャンを紹介するにあたり、西洋絵画史の変遷についても簡単に触れ、バルビゾン派や印象派の作家が戸外で活動できるようになった背景に子供達にも身近なチューブ入りの絵具の登場があったこと、印象派やキュビズムの作品の登場の背景に絵画や彫刻を上回る写実技術を伴う写真の登場があったことをクイズ形式で紹介し、子供達の意欲を高めた。[23] さらに、リズミカルな輪郭線、青・黄・赤の三原色を基調とした平面的・二次元的な塗り分け、木や建物の形状の抽象的表現等、フォービズムやその後の抽象表現へとつながるゴーギャンならではの表現の面白さや魅力を紹介した。その上で、作家によって表現方法は千差万別であり、目に見えるものを写実的に描くことだけが表現ではないことを伝えた。（図４）

続いて、曽宮一念の「自画像」を取り上げた。曽宮は日本洋画史に名を遺す著名作家であることはもちろん、1945 年（昭和 20）に富士宮市に移り住んで活動をしており、Ｋ小学校の子供達にとって地域ゆかりの作家といえる。[24] 曽宮の自画像は、曽宮の画友である鶴田吾郎が曽宮を描いた「余の見たる曾宮君」と並べて展示していたため、それらを比較する形で鑑賞させようと考えた。子供達に曽宮の自画像を紹介した後、全く別の人物を描いた作品であるかのように鶴田の作品を紹介した。子供達は鶴田の作品も曽宮を描いたものであることを知ると、自身が描いたものと友達が描いたものとで作風や印象が大きく異なることに驚いていた。また、曽宮ほど著名な作家も、学生時代は友達と自分たちの姿を描き合い切磋琢磨していたこと、曽宮や鶴田のように、友達同士で絵を描き合ってみると、自分が見る自分と他人から見える自分の違いが見えてくるかもしれないことを伝えた。（図５）

図４　ゴーギャン作品の鑑賞

図５　曾宮作品の鑑賞

＜作品群②＞

はじめに、石田徹也の「燃料補給のような食事」を取り上げた。子供達に何が描かれているか尋ねると「牛丼屋」、「店員さんとお客さん」、「食べさせている」等、描かれたモチーフを次々に見つけた。そのうちに、「人が無表情でこわい」、「ガソリンスタンドみたいで何か変」等、作品に漂う奇妙さについて指摘する声もあがった。その上で本作に日本の社会情勢が風刺されているかもしれないことを紹介した。あわせて、美術作品には作家がメッセージや主張を内包する場合があること、そうした作家の意図を、モチーフの形や色、作品全体のイメージをもとに探究することも美術作品の鑑賞の面白さであることを伝えた。（図６）

次に宮島達男の「LIFE(complex system)no.1」を取り上げた。この作品は、画面上に取り付けられた多くの LED デジタルカウンターが０から９の数字を刻む。子供達には、一つのデジタルカウンターの数字の変化の仕方やそのスピードに注目させた。「１つずつ増える」、「なかなか変わらない」、「９の後消えた」等、様々な気付きが見られた。子供達に数字の変化が何を表しているかを考えさせた上で、一つ一つの LED デジタルカウンターは１人の人の一生を表していることを伝えると驚いた様子であった。さらに、数字の変化は周囲のデジタルカウンターの数字にも影響される他、画面中央には人感センサーが取り付けられ、そこに立つ鑑賞者に反応し、数字を刻む速さが変化することを伝えた。子供達は数字の変化に何かきまりはないかとじっくりとデジタルカウンターを見つめたり人感センサーの前に立って数字の変化を確認したりと、宮島作品に高い関心を示し友達と対話しながら主体的に鑑賞を続けていた。作品のテーマの具現にはデジタルを含めた多様な表現方法や可能性があることを伝えた。（図７）

図６　石田作品の鑑賞

図７　宮島作品の鑑賞

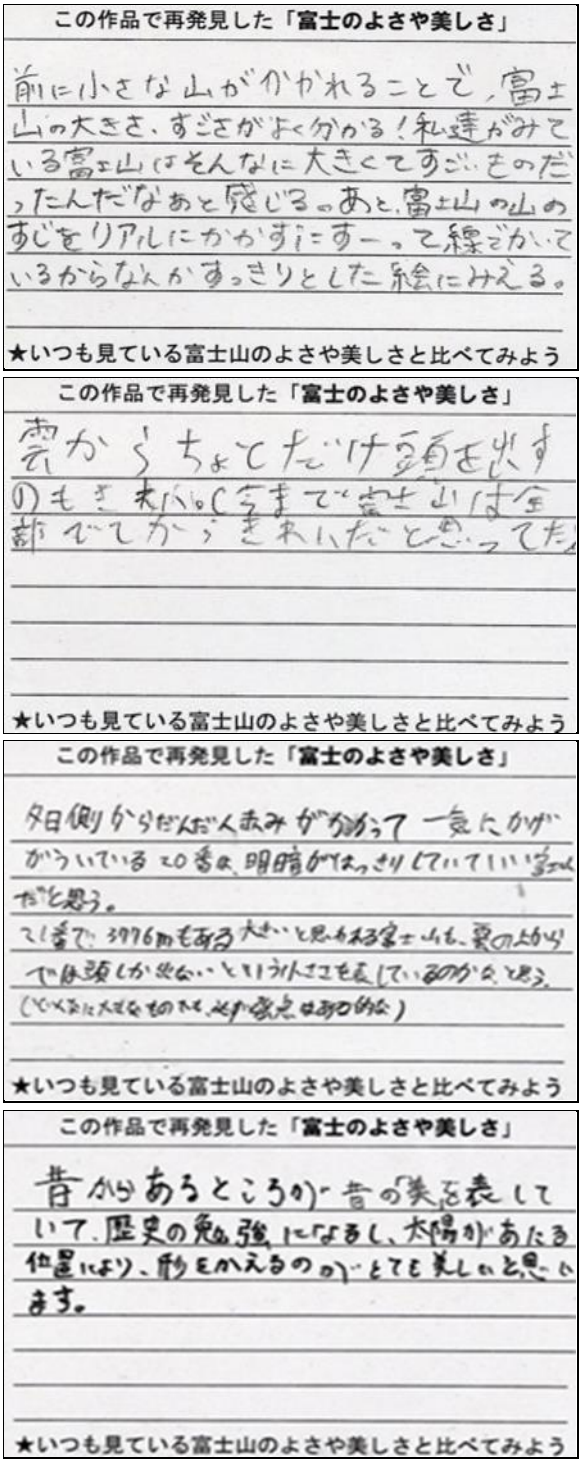
最後に森村泰昌の「批評とその愛人⑴～⑺」と「マケット」を取り上げた。セザンヌの「りんごとオレンジ」をもとに、それらを別の視点から見た作品６点と、りんごとオレンジそれぞれに森村自身の顔が合成された作品である。まず、視点の異なる６点の作品を比べ

るように伝えた。この時点では、筆者が森村の顔が合成された作品の前に立ち、子供達の視界に入らない様にした。すると、「向きが違う」、「角度が違う」等、それぞれの違いに気付きはじめた。その後、筆者が立ち位置を変え、りんごとオレンジに顔が合成された作品を提示すると、「うわ」、「何これ」、「人の顔だ」と、様々なつぶやきが聞かれた。子供達に「この顔は誰だろうね」と投げかけながら、この作品が森村によるセザンヌの作品のオマージュであること、合成された顔が「名画になる」というコンセプトのもと森村自身を合成したものであることを伝えると、大変驚いた様子だった。加えて、子供達の背後に展示されていたマケットを提示し、制作の過程で、森村がマケットを制作し、様々な角度から写真を撮っていること、ここまで鑑賞してきた「批評とその愛人⑴～⑺」は、全てこのマケットを撮影した写真をもとにした作品である事実を伝えた。（図８）森村による表現のコンセプトや表現方法は、子供達にとって驚きの連続であり、美術作品に関する既成概念を大きく覆すものであると同時に、多様な発想や構想、表現方法が許容されることを実感させることに大いに寄与した。

図８　森村作品の鑑賞の様子

② 修学旅行で再発見！－私たちの富士の魅力－

県美展では、計 13 点の富士山を主題とした作品が出陳された。それらは一つの特集コーナーを形成し、県美展の中核を成すものであった。[25] 日常から富士山に慣れ親しんでいる子供達にあえてこれらの作品群と対峙させ、富士山について「造形的な見方・考え方」からそのよさや美しさを実感させることを通して、富士山に対する新たな価値や魅力を見出してほしいと考えた。オリエンテーションにて、ワークシートに気になった作品とその理由を、「富士山やその他のモチーフに描かれているものの形や色」、「イメージしたこと」、「表し方の特徴」を視点にメモするように伝えた後、子供達と引率教員で富士山に関するコーナーを自由に周り鑑賞した。本来であれば、筆者が常にその場におり、必要に応じて子供達と対話したり質問に答えたりすること、鑑賞後に全員で気になった作品を紹介し合ったり見出した富士山の新たな価値や魅力について対話したりしたいところであったが、滞在時間とプログラム構成上、それは叶わなかった。そのため、引率教員の協力のもと、後日、ワークシートのメモをもとに、普段富士宮市から見ている富士山と様々な場所から多様な表現方法で描かれた富士山を比較し、改めて気付いた富士山の「よさや美しさ」についてワークシートにまとめさせることで、活動の代替とした。ワークシートの記述には、富士山の大きさや見え方について、新たなよさや美しさを見出した様子が伺える。（図９）



この作品で再発見した「富士のよさや美しさ」

前に小さな山がかかれることで、富士山の大きさ、すごさがよく分かる！私達がみている富士山はそんなに大きくてすごいものだったんだなあと感じる。あと、富士山の山のすじをリアルにかかずにすーって線でかいているからなんかすっきりとした絵にみえる。

★いつも見ている富士山のよさや美しさと比べてみよう

この作品で再発見した「富士のよさや美しさ」

雲からちょっとだけ頭を出すのもきれいで今まで富士山は全部でてからきれいだと思ってた。

★いつも見ている富士山のよさや美しさと比べてみよう

この作品で再発見した「富士のよさや美しさ」

夕日側からだんだん赤みがかかって一気にかがかがいいている。その為、明暗がはっきりしていていいなんだと思う。

でも実際3776mもある大きいと思われる富士山も、雲の上からでは頭しか出ないとちいささを表しているのかな、と思う。

（でもやはり大きなものだから、必ず発見はあるのかな）

★いつも見ている富士山のよさや美しさと比べてみよう

この作品で再発見した「富士のよさや美しさ」

昔からあるところが、昔の美を表していて、歴史の勉強になるし、太陽があたる位置により、形をかえるのがとても美しいと思います。

★いつも見ている富士山のよさや美しさと比べてみよう

図９　ワークシートの記述（上から A・B・C・D）

５　成果と課題

⑴　＜仮説１＞について

静岡県立美術館を代表する所蔵品で、県美展のキービジュアルとして展覧会ポスターやテレビＣＭでの露出が多かったゴーギャンの「家畜番の少女」を活動の序盤で取り上げることは、子供達が著名な作家の作品や展示の要となる作品の実物に直接触れる機会を創出し、美術館利用の最大の強みを存分に生かした活動の導入につながった。ゴーギャンのフォービズムやその後の抽象表現へとつながる表現は、いわゆる写実重視のアカデミックな作風とは一線を画すもので、モチーフの形や色、作品全体の印象や雰囲気等、造形的な要素に着目することで、子供達を作品の世界に引き寄せることができたものと思われる。また、ゴーギャンのような抽象的な表現へ至る西洋絵画史の変遷について、クイズを交えて紹介できたこと、クイズの内容が「チューブ入りの絵の具」や「写真」等、小学生にも身近でイメージしやすいものであったことも、子供達の主体的な反応を引き出したものと推察される。

しかし、鑑賞時間を十分に確保できず、形の抽象性や独特の輪郭や色使いについて、子供達の声や反応を十分に拾い上げることが難しく、一部の子供達の表面的な発言でのみ鑑賞活動を進行してしまった。また、西洋絵画史の変遷については、ゴーギャンによる本作だけではなく、出陳していたバルビゾン派のコローや印象派のモネの作品を取り上げながら、その違いについて子供達と対話しながら捉える方法も検討したが、展示フロアが異なり、実現に至らなかった。この点は、どうしても知識の伝達に終始してしまった感は否めず、子供達もイメージし辛かったであろうことが推察され、改善すべきであろう。現状、教育普及プログラムは完成した展示構成ありきで考案することが多いが、予め教育普及プログラムの流れや子供達の動線を想定して展示計画を立てることも視野に入れていきたい。

曽宮一念の「自画像」は、自画像という子供達にも経験がありそうなテーマであったこと、鶴田吾郎の「余の見たる曾宮君」との比較を通して友達と互いの姿を描き合うという子供達が想起しやすいであろうエピソードを交えて紹介できたことが、子供達の鑑賞への主体性を引き出すことにつながったものと考えられる。さらに、鶴田吾郎の「余の見たる曾宮君」との比較から、同じモチーフを描いたものでも作者によって視点や表現方法が様々で印象も大きく異なることの面白さを伝えたことも、子供達の主体的な反応を引き出した。

一方、＜仮説３＞との関連で、曽宮一念が富士宮市ゆかりの作家であることに関する情報提供が希薄であったことが課題としてあげられる。地域との関連性に焦点を当てることで、子供達の関心もより高まることが予想されるが、時間的な制約や自画像という作品の特性から、そこに着目した視点の提示や発問を考案することが難しかった。また、子供達の曽宮への認知度について、事前に教員にレディネスを確認した上で、プログラムの内容を検討することも必要であったといえる。さらに、曽宮の作品を扱うことを事前に教員に共有し、事前学習等の措置を講ずることができれば、鑑賞時間の制約に大きく影響されることなく、地域との関連を考慮した鑑賞活動を展開することができたかもしれない。

ゴーギャン、曽宮の作品の鑑賞活動は、依然課題を孕むものの、子供達の反応には＜仮説１＞の方向性に沿う要素が概ね垣間見え、一定の成果が見られた。しかし、「深い学び」の具現には、「実物」との対峙に時間をかけ、子供達の「造形的な見方・考え方」を働かせた主体的な対話をもとにした鑑賞活動の展開が不可欠であるといえる。教育普及プログラムの内容はもちろん、限られた時間の中での効果的なプログラムの構成を含め、さらなる改善に努めたい。

⑵　＜仮説２＞について

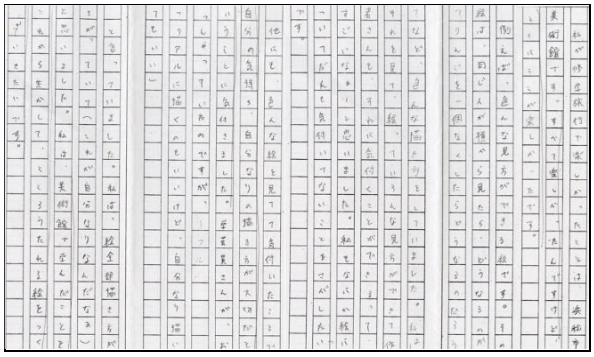
石田徹也の「燃料補給のような食事」の鑑賞では、「牛丼屋」と「ガソリンスタンド」という一見分かりやすいモチーフが、無表情な人間を介して奇妙に組み合わされている様に戸惑いながらも、描かれているものや人物の表情、作品全体の印象等から、石田が何を伝えたかったのか、主題を探究するように作品に対峙する様子が見られた。そして、作品に込められる作家のメッセージや主張という、美術作品の鑑賞において子供達の見方や感じ方を広げたり深めたりする視点を提示することで、子供達のさらなる驚きを引き出し、作品に惹きつけることができたものと推察される。

作品に込められる作家のメッセージや主張という点では、宮島達男の「LIFE(complex system)no.1」も同様に子供達の高い関心を集めた。数字で人の一生を表すというメッセージ性も去ることながら、「デジタルカウンター」という材料（素材）によって動かされる「数字」をモチーフとした美術作品との出会いは、子供達の美術作品に対する既成概念を大いに覆すものといえ、数字の変化の仕方やそこに込められた意味を見出そうと主体的に鑑賞活動を継続する子供達の姿につながったものと考えられる。

美術作品に対する既成概念を覆す作例として、森村泰昌の「批評とその愛人⑴～⑺」、「マケット」を取り上げたことの効果は非常に大きかったといえる。一見同じ絵が並んでいるように思える作品群は、セザンヌの作品のオマージュで、その作品が別の視点で描かれていたらどうなるかを検討した結果であることには、子供達の関心を高める要素が満載である。加えて、作品群すべてが、森村がセザンヌの作品を立体（マケット）に表し、様々な角度から写真に納めたものがもとになっていること、その一部に「名画になる」というコンセプトのもと森村自身の顔が合成されていること

は、子供達にとって驚きの連続であったことだろう。

子供の１人は、修学旅行全体に関する振り返り（図10）の中で、浜松市美術館の訪問と活動について「とくにここが楽しかった」（下線①）と述べている。森村作品の鑑賞から、「絵っていろんな見方ができて作者さんも、それに気づくことができてすごいなぁーって思いました。」（下線②）とし、「私も絵についてだれも気付いていないことをさがしたいです。」（下線③）と自身の抱負につなげている。また、「自分の気持ち、自分なりの描き方が大切ということに気付きました。」（下線④）、「絵全部描き方がちがっていて（これが自分なりなんだなぁ）と思いました。」（下線④）と続けており、アカデミズムに捉われない作家ならではの斬新なテーマ設定や表現方法は、子供の興味・関心を掻き立て、自分の見方や感じ方を広げ深めることにつながったことが読み取れる。この記述が修学旅行全体の振り返りに表れたことの意味は大きく、作品群②の鑑賞がこの子供にとっての修学旅行の「楽しい思い出」作りにも寄与したものと推察され、大きな成果といえるのではなかろうか。



私が修学旅行で楽しかったことは浜松市美術館です。すべて楽しかったんですけど、①とくにここが楽しかったです。

例えば色んな見方ができる絵です。その絵は同じ人が横から見たら、どうなるのか？りんごを一個なくしたらどうなるのだろう？など、色んな描き方をしていました。私はそれを見て、②絵っていろんな見方ができて作者さんも、それに気付くことができるって、すごいなぁーと思いました。③私も絵についてだれも気付いてないことをさがしたいです。

他にも、色んな絵を見てて気付いたことで、④自分の気持ち、自分なりの描き方が大切だということに気付きました。学芸員さんが、おっしゃっていたのですが、「リアルに描くのもいいけど、自分なりに描いてもいい」と言っていました。私は、④絵全部描き方ちがっていて（これが自分なりなんだなぁ）と思いました。私は、美術館で学んだことをこれからに生かして、こころうたれる絵をつくっていきたいです。

図 10　修学旅行全体に対する子供の振り返り（原文Ⓛ・抜粋Ⓣ ※下線筆者）

引率教員の反応も上々で、＜作品群①＞のギャラリートークを含め、「やはり話を聞くと価値や意味がよく分かる。」、「全部の作品の解説をずっと聞いていたいくらいだ。」との感想が聞かれた。子供達の学びを保証しつつ、修学旅行を含めた「楽しい思い出」作りとしての美術館利用を促すには、引率する教員の満足度を高めることも必要な要素であり、学校との連携のもと長期的な実践の継続が求められよう。

しかし、＜仮説１＞で生じた課題同様、鑑賞時間に限りがあり、子供達の声や反応を十分に拾い上げることが難しく、一部の子供達の発言のみで鑑賞活動が進行してしまった部分は否めない。鑑賞時間に応じたさらなる作品の厳選が必要とも思えるが、子供達の興味関心は一様ではなく、様々な作家の作品が並ぶ美術館において、子供達が自分なりの感性を働かせて、よさや美しさを見出せる作品に自由に対峙できる時間を確保したプログラム構成の必要性も感じるところであり、そのバランスの取り方を検討する余地があろう。

⑶　＜仮説３＞について

Ｋ小学校からは、富士山を裾野から頂上まで、ダイナミックに見ることができる。このスケール感に加え、遮るものが何もない様子が、Ｋ小学校の子供達にとっての富士山の魅力の１つであろう。活動を通して、富士宮市以外の場所から描いた富士山を見て、その手前に別の山々が描かれていることから、改めて富士山の大きさに関する魅力を実感する子供がいたことが振り返りから読み取れる。（図９－Ａ）また、雲の隙間から頂上のみ姿を現す富士山の作品を見て、全てが見える美しさとともに、一部だけ見えることの美しさに気付く子供もいた。（図９－Ｂ）これらの表れは、富士山の造形的なよさや美しさを、鑑賞した作品に描かれた富士山との比較を通して検討したり、価値を再構築したりする姿といえよう。美術作品に表現された富士山の「別の一面」に触れることを通して、自分の見方や感じ方を深めることができたものと推察される。これらの表れは、図画工作科としての学びに留まるものではなく、総合的な学習の時間、特別活動等の「見方・考え方」から見出すことができる郷土愛に関する資質・能力の育成にも寄与するものと評価でき、「教科等横断的な学び」から自分たちが暮らす地域に対する価値を再構築し、愛着を高めることにもつながった。雲の隙間から頭頂だけを覗かせる富士山の写真（石川直樹「Mt.Fuji #38」）に、空や雲をもとにあえて富士山の小ささを現すことで、「どんなに大きなものでも必ず弱点がある」というメッセージが込められているのではないかと考える子供がいた。（図９－Ｃ）＜作品群②＞の鑑賞で、美術作品に込められる作家のメッセージや主張に触れたことが影響を与えたのかもしれない。これは作品の造形的要素から情報を精選し、自分なりの価値を見出す「深い学び」につながる表れといえる。古くから著名な作家によって描かれた様々な富士山を通して、古来より富士山に美しさが見出されていたことに関心を示したり、歴史（社会科）の学習との関連

を示唆したりする気付きが見られた。（図９－Ｄ）この気付きは、富士山や富士山を擁するＫ小学校の所在する地域への郷土愛につながる重要な指摘であり、総合的な学習の時間の富士山に関する探究課題の解決に活用できる可能性を有するものであると考える。本実践は、特別活動での修学旅行、図画工作科での作品鑑賞、総合的な学習の時間での探究課題解決を、教科等横断的に結び付けるもので、各教科・領域で育むべき資質・能力の育成と子供達の修学旅行の「楽しい思い出」作りの双方に寄与するものといえるのではなかろうか。

ただし、＜作品群③＞の鑑賞は、片方のグループが＜作品群①＞、＜作品群②＞に関するギャラリートークを実施中に子供達のみで行ったことで、学芸員による活動中の補助発問や個に応じた声掛けが叶わず、表面的な鑑賞に留まってしまったものと考えられる振り返りも複数見られた。子供達だけで鑑賞することを前提としたワークシートの工夫、事前に引率教員と活動の意図やねらいを十分に共有したうえで活動中の声掛けや助言を依頼することが必要であったと思われる。また、本実践における子供達の学びが、その後の総合的な学習の時間における探究課題の解決に効果的に活用されたかは、事後の連携が希薄となり、十分に確認することができなかった。事後の教員との連携による美術館を活用した単元を構想することを通して、学びの継続性を担保することができたかもしれない。いずれの課題についても、美術館での鑑賞活動を一過性のものにせず、事前・事後を含めた博学連携による教育普及プログラムの開発が求められることを示唆する。

７　おわりに

修学旅行で地域の美術館を訪れた子供達に対して、著名な作家の作品や展示の要となる作品、作家ならではの豊かな発想力や構想力、テーマ性や表現方法の独自性の顕著な作品、美術館や展覧会の独自性と子供の実態や学校所在地の地域性の接点となる作品等をもとにした教育普及プログラムを提供することで、図画工作・美術科はもちろん、特別活動や総合的な学習の時間で育くむべき資質・能力の片鱗を数多く垣間見ることができた。これは修学旅行での学校団体の受け入れという、地域の美術館でこれまで機会を得難かった新たな学校の美術館利用の可能性を見出したものといえよう。ただし、ここで見出された新たな視点は、完全に区切られるものではなく、相互に関連付けられることによって、子供達の多様な学びを補完し合うものであることに留意が必要である。また、その土壌には美術館（学芸員）と学校（教員）の共通理解や相互理解、美術館での学びを一過性のものとしない事前・事後の活動を視野に入れた継続性のある連携が必要不可欠で、これらの諸要素を考慮したうえでの作品の選定やプログラムのカスタマイズが求められるものと考える。

本論で紹介した教育普及プログラムは、県美展の出陳品や展示構成に支えられた側面が大きく、展覧会の内容そのものが教育普及プログラムの効果を左右することを示唆する。美術館は、館単独の自主企画や全国の館を巡回するパッケージ企画等、様々な形態で展覧会を実施する。前者の展覧会では、作品選定や展示構成検討の段階で、近隣地域はもちろん修学旅行等で他地域の学校団体の来館があった場合を含め、どのような教育普及プログラムのカスタマイズが可能かを念頭に置いた企画立案に留意することが肝要である。後者の展覧会は出陳作品や展示構成は概ね固定されている為、その展覧会とは別の展示室で館蔵品を活用した展示を併せて実施することができれば、その中で前者の展覧会と同様の措置を講じることが可能になるものと思われる。また、収蔵品関連の体験活動（ワークショップ）を含むプログラム開発の検討も可能であろう。

修学旅行の訪問先の定番とはいえない浜松市の美術館で、修学旅行中の子供達を受け入れ教育普及プログラムを実施した。その事実とそれを今後も継続しようという姿勢の拡散には、何よりも積極的な情報発信が欠かせないであろう。ホームページやSNSの活用はもちろん、市観光部局や文化振興担当部局、旅行会社との連携により、浜松城や浜名湖等、他の観光施設と組み合わせた旅程を検討・提案することも可能かもしれない。[26] 美術館（学芸員）側の、あらゆるリソースの活用を検討する広い視野と柔軟性、アンテナの高さは、修学旅行での地域の美術館の利用という新たな可能性を広げる重要な要素かもしれない。

［註］

１）島口直弥「学校の美術館活用を促す教育普及プログラムの開発－西洋絵画展における実践を中心に－」『美術教育 No. 304』日本美術教育学会 2020年、pp. 144-145

２）令和２年の浜松市美術館企画展「挑む浮世絵」展に静岡県東部地域の小学校２校、群馬県の小学校１校の修学旅行に伴う団体鑑賞を受け入れた。しかし、コロナ禍を鑑み、ギャラリートークや対話型鑑賞等の教育普及活動の実施は見送った。

３）2021年の修学旅行先における旅行先（中学校）として、京都（１位）や奈良（２位）等の修学旅行訪問先の定番都市に加え、コロナ禍以前は上位10位以下だった山梨（３位）や長野（４位）が上位に入ったことが特筆される。静岡も同様の傾向を示し、2019年の17位より順位を上げ９位となった。（「国内修学旅行の実態とまとめ［中学校］」『教育旅行年報データブック 2022』公益財団法人日本修学旅行協会 2022年、pp. 14-27）

４）島口直弥「静岡の『県立美術館』と浜松の『市立美術館』－双方の使命とその融合－」『静岡県立

美術館ニュース アマリリス No.143』2021 年、p.4

5）柴田元「民博を修学旅行の事前学習に活用する－世界史 A の授業や「総合的な学習の時間」を通して－」『国立民族学博物館調査報告 56』（国立民族学博物館 2005 年、pp. 187-205）は、修学旅行での世界史と総合的な学習の時間の教科等横断的な学びの事前学習に博物館を活用した一例である。

6）「活動報告」『上原美術館通信 No.17』公益財団法人上原美術館、2022 年、p.6

7）島口直弥「『児童の見方や考え方』×『鑑賞』『仏像をみる』身近な地域に伝わる祈りの造形」『表現する教室のつくり方』大橋功、鈴木光男他 東洋館出版社 2022 年、pp.102-103

8）旅行内容のうち、「重点を置いた活動」について、「美術館等の見学」の項目の順位が、中学校で 23 位（2019 年）から 17 位（2021 年）へ、高等学校で 22 位（2019 年）から 12 位（2021 年）へと上昇した。(「国内修学旅行の実態とまとめ[中学校]」、「国内修学旅行の実態とまとめ［高等学校］」『教育旅行年報データブック 2022』公益財団法人日本修学旅行協会 2022 年、pp.14-41)

9）小林久美子「絵画と戦争(2)中学校美術科における藤田嗣治の「戦争画《アッツ島玉砕の図》」の鑑賞授業について」（『美術教育学研究 大学美術教育学会誌』大学美術教育学会学会誌委員会 2016 年、pp.161－168）等、修学旅行の訪問先として定番の都市の美術館における実践報告は確認される。

10）近著では、「特集１：地域の公共施設を活用した教育活動の推進」(『初等教育資料 2020 年９月号』文部科学省 2020 年 pp.2-34)、「特集Ⅱ：学校外の人材や施設を活用した芸術に関する指導」(『中等教育資料令和３年９月号』文部科学省 2021 年 pp.30-42）にて、小・中学校、高等学校における「美術館・学芸員」を含む「施設・人材」の活用に関する特集が組まれたが、地域の学校が地域の施設を利用しての実践の報告が大多数であり、修学旅行における訪問都市の施設の利用に関するものは取り扱われていない。また、「特集：博物館からはじまる教育旅行での探究学習」（『月刊教育旅 2022 年１月号』公益財団法人日本修学旅行協会 2022 年、pp.4-16）では、６本の修学旅行に関する事例や取り組みが紹介されたが、そのうち５本は修学旅行訪問先の定番といえる都市に所在する館（東北歴史博物館、京都府文化博物館、島根県立古代出雲歴史博物館、九州国立博物館、沖縄県立博物館・美術館）のもので、美術館に関するものは沖縄県立博物館・美術館の１本である。

11）島口直弥・芳賀正之「美術館における地域の仏像を取り上げた教育普及プログラム－美術館と学校の連携を軸とした『教科等横断的な学び』の可能性－」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』静岡大学学術院教育学領域 2022 年、pp.146－159

12）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説・図画工作編」 文部科学省 2017 年、p.121

13）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説・美術編 文部科学省 2017 年、p.135

14）島口直弥「地域の文化財の価値と魅力を広げ深める展覧会事業の具現－『みほとけのキセキー遠州・三河の寺宝展－』の『展示』と『広報』の事例から」『静岡県博物館協会研究紀要第 45 号』静岡県博物館協会 2022 年、pp.24-31

15）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説・特別活動編 文部科学省 2017 年、p.101

16）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説・特別活動編 文部科学省 2017 年、p.121

17）前掲書 15、p.97

18）前掲書 16、pp.121-122

19）前掲書 15、p.97

20）遊免寛子「教美アートギャラリー（第６回）兵庫県立美術館（兵庫県）」（『教育美術 2022 年 12 月号』公益財団法人教育美術振興会 2022 年、p.8）にて、小学生に白髪一雄≪作品Ⅱ≫を鑑賞させた事例について、「学校では、作品名は何を表現したものかが伝わるように付けないといけないし、見たものを写実的に表現できる人ほど絵がうまいという評価を得ることが多い。その価値観に全く当てはまらない作品に美術館で出会うことは一種の衝撃体験といえる。でも、子どもたちは、それを否定することなく面白がっている。」と述べられ、本論＜仮説２＞に重なる実践報告といえる。

21）木下直之「なぜ風景の美術館なのか なぜ風景と人間なのか」『静岡県立美術館ニュース アマリリス No.143』静岡県立美術館 2021 年、pp.2-3

22）植松篤「移動美術展 静岡県立美術館 超名品展 風景と人間」『静岡県立美術館ニュース アマリリス No.143』静岡県立美術館 2021 年、p.5

23）県美展ではバルビゾン派のコロー、印象派のモネ、キュビズムの影響を受けるミロの作品を展示していたため、関連事項として解説を実施した。

24）曽宮の作品は、＜仮説３＞の「学校所在地の地域性の接点となる作品」であることにも留意して取り上げたものである。

25）富士山に関する作品は、＜仮説１＞の「著名な作家の作品や展示の要となる作品」であることにも留意して取り上げたものである。

26）金沢市は、金沢２１世紀美術館と兼六園やひがし茶屋街等の短時間での周遊を PR し、誘客を試みている。(『北陸新聞』記事 2022 年 6 月 16 日付)